

下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

中越遺跡

長野県上伊那郡宮田村

1992

宮田村遺跡調査会

下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

中越遺跡

長野県上伊那郡宮田村

1992

宮田村遺跡調査会

序

昭和31年、宮田村における初めての学術調査が実施されて以来、昭和59年まで14次にわたる発掘調査をしてきた中越遺跡では、その後、西原土地区画整理事業の進行にあわせて、10次をこえる調査を実施し記録保存をはかってきたわけですが、今回、区画整理の第1工区外において下水道工事が計画されたため、その部分について、記録保存のための発掘調査を平成2年度から3年度にかけて実施してきました。そして、役場と中央グランドの北方において、16軒の縄文時代前期の住居址を検出したのであります。

工事によって破壊される部分のみを調査して記録保存するということで、住宅地の中の狭い道路の上での発掘となる関係上、当初、様々な困難が予想されたのですが、幸い、地元の皆さんと工事関係者の御理解と御協力により、初期の目的を果たすことができました。

それらの皆さんと、宮田村遺跡調査会会长友野良一先生をはじめとする、現場での作業にあたられた多くの皆さんに感謝申し上げ、刊行の言葉とする次第であります。

平成4年3月31日

宮田村教育委員会

教育長 林 金茂

例 言

1. 本書は、平成3年3月と同年7月・11月に実施した、中越遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、宮田村長の委託をうけ、宮田村遺跡調査会が実施した。
3. 年度内に刊行しなければならない必要もあって、報告書の内容は、資料を示すことに重点をおいてある。
4. 報告書中の遺構実測図や遺物実測図、拓影図は次のように縮小率を統一した。
遺構全体図……1/1,000 住居址……1/80 縄文土器実測図……1/4 拓影図……1/3 石器実測図……2/3、1/4
5. 縄文土器の図の中の、断面ドットは繊維を、斜線は石英粒と繊維を含む土器を示す。
6. 本調査にかかる記録や図面類、出土遺物は、宮田村教育委員会が保管している。

目 次

序

例 言

第1章 遺跡の概観と調査の経過.....	1
第1節 遺跡の立地.....	1
1 自然環境・地質.....	1
2 歴史的環境.....	2
第2節 調査の経過.....	3
1 調査にいたるまで.....	3
2 調査の組織.....	4
3 調査の経過.....	4
4 遺物の分類と造構番号について.....	5
(1) 遺物の分類 (2) 造構番号	
第2章 造構と遺物.....	7
第1節 平成2年度調査結果.....	7
1 繩文前期の造構と遺物.....	7
(1) 154号住居址 (2) 155号住居址	
2 繩文中期の遺物.....	8
3 その他の造構.....	9
第2節 平成3年度調査結果.....	10
1 繩文前期の造構と遺物.....	10
(1) 166号住居址 (2) 167号住居址 (3) 168・169・170号住居址	
(4) 171号住居址 (5) 172号住居址 (6) 173号住居址	
(7) 174・175・176号住居址 (8) 177号住居址 (9) 200・201号住居址	
2 造構外の遺物.....	28
第3節 発掘調査の成果.....	29
1 繩文前期の集落.....	29
2 胎土に石英粒を含む土器について.....	29
第3章 結語.....	30

第1章 遺跡の概観と調査の経過

第1節 遺跡の立地

I 自然環境・地質

中越遺跡は、天竜川右岸に発達した太田切扇状地の、北側の扇端部に位置し、扇端である天竜川河岸から遺跡の中心部までは、約1kmを測る。この扇状地面は、小河川によって放射状に開析され、いくつかの長峰状の台地の連なりとなっており、遺跡の位置は、大沢川と小田切川の間の台地上の、大沢川がその侵食面を明確にし始める地点でもある（図1）。

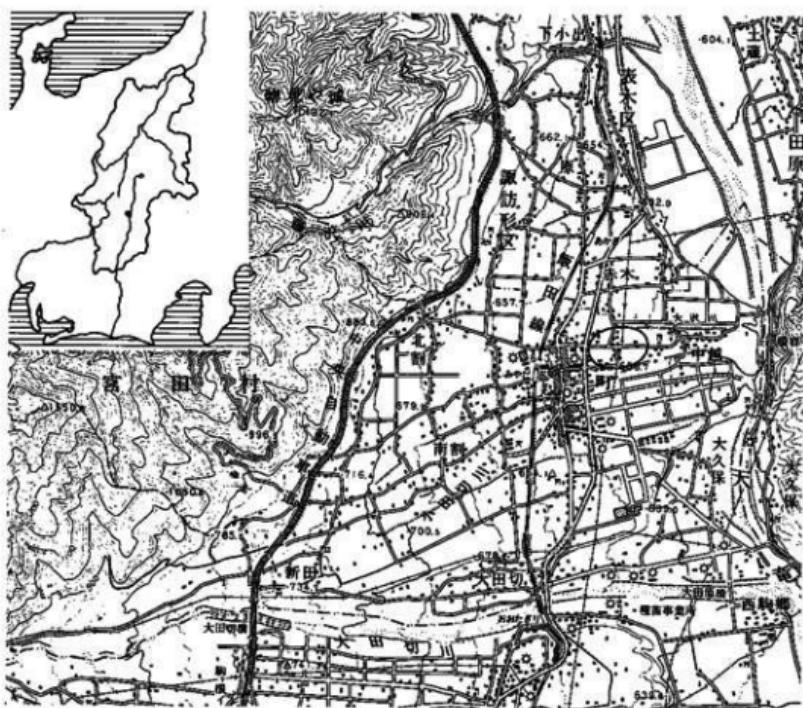


図1 位置図（5万分の1）

大沢川と小田切川の間に形成された台地の上面は、両河川の侵食等によって、様々な変化をみせているのだが、遺跡付近では、台地南縁に部分的に形成された低位面と、北の広い高燥面とで構成されており、後者はさらに、やや低い南側と、高い北側に分けることができる。

遺跡の範囲の台地上は、現在は東へゆるく傾斜する平坦面となっているが、今日までの発掘調査で、東流するいくつかの小さな流れや溝が確認されており、腐塙土層の厚さが極端に薄い地点などもあることから、当初は、もう少し起伏に富んだ地形であったと想定される。近年、遺跡付近では宅地化が進み、実施中の土地区画整理事業の完了を待つことなく、次々と住宅が建てられつつあるのが現状だが、昭和40年代以前は一面の畠地帯で、しかも、「西原」という字名が示すように、東方の、中世からの歴史をもつ中越集落からみて西に広がる原であったわけで、畠地であった期間は相当長かったであろう。少し前まで、石積みを設けて畠を平坦に整地した痕が所々に見られ、現地形は、かなり整地された後の姿ということができよう。遺物が採集できる場所として、興味ある人達に知られた場所だったということだが、そのことは、遺物が豊富だった事を示すとともに、耕作によって多くの遺物が地表へと掘りだされてきたことをも示すわけで、遺跡の保存状態は良くない。

遺跡付近の表土あるいは耕作土の下は、黒褐色土、褐色土、黄褐色土、を経て黄色土に移行するのが一般的であり、腐塙土の深い地点では、黒褐色土の上に黑色土が存在し（掘り方の深い住居址の埋土上層には、この黒色土がしばしばみられる）、浅い地点では、黒褐色土、次いで褐色土が欠けるかごく薄い。黄色土の下には、太田切層状地を構成する拳大から人頭大、さらにはひとかかえもある巨大な礫が存在しているのだが、腐塙土の浅い地点では、それらの礫が表土下に顔を出している所もある。

また現在は、ほ場整備等によってすべて濡れてしまったが、台地北縁に湧水があり、中央グランド付近にも、かつては湧水があったということであり、これ等の水が、この地に営まれた縄文時代の集落に生活していた人々の、生活用水であったのである。

中越遺跡には、高燥な台地北縁に展開する縄文前期中越期を中心とする集落と、同じ台地の南縁に連なる縄文中期の集落、南の低位面に位置する縄文後期の墓域と考えられる集団墓までが含まれており、結果としてその規模は、約24haと広大なものとなっている。

2 歴史的環境

大沢川と小田切川にはさまれた台地上面のほぼ中央には、先に述べた居住性の良さを証明するように、古くから連続と続く遺跡が確認されている。すなわち、中越遺跡で村内に2例しかない先土器時代の尖頭器が採集されることから始まり、縄文草創期から早期の住居址が検出された向山遺跡、縄文前期と中期の大集落が営まれ、縄文後期の墓域も確認されている中越遺跡。弥生後期の大集落である姫宮遺跡。主要部が発掘されていないが、奈良時代の終わりから平安時代を通じた集落が想定されている田中下遺跡などがそれである。さらに、カラス林、三つ塚の古墳

群もまた、まさにこの台地を見下ろしており、この付近の中核都市が、常にこの地に存在し続けていたことがわかる。江戸時代の人工的に作られた町並みである宮田宿を、これらの遺跡の集中する範囲のはば中央を選んで設けたのは、象徴的出来事といえよう。

第2節 調査の経過

I 調査にいたるまで

中越遺跡付近における下水道工事は、西原地区区画整理事業に伴う道路改修や新設と並行して実施してきたのであるが、平成2年度末に宮田村役場より、平成3年度から、第1工区として区画整理事業を進めている地区以外でも、工事をする必要が生じてきたとの連絡を受けた。

そこで、宮田村遺跡調査会と宮田村教育委員会は、担当課である下水道課と協議し、調査すべき地点と調査期日を決定した。

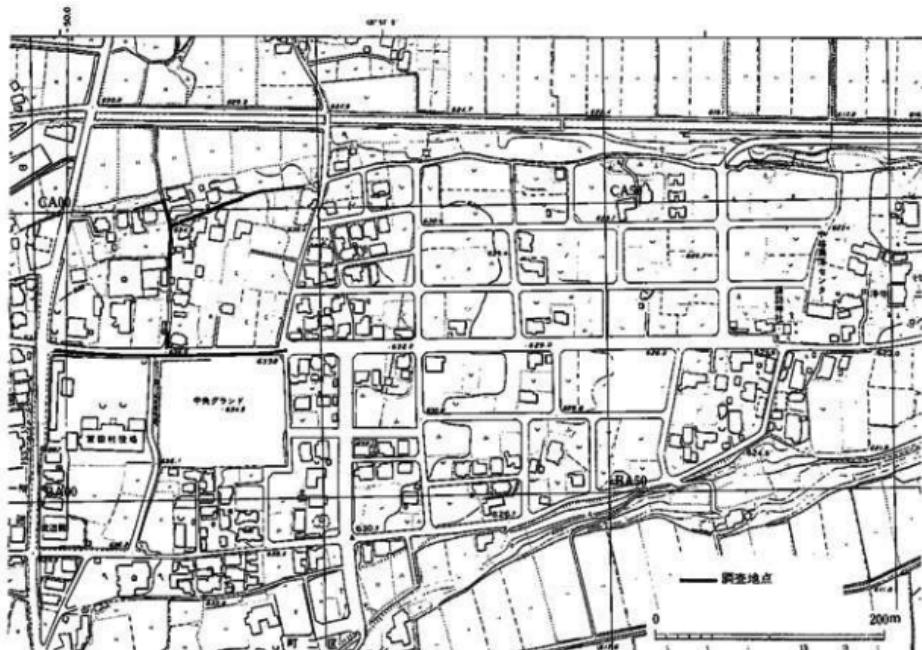


図2 調査地点図（「宮田村平面図」—平成元年12月作成—をもとに作図）

調査は、工期との関係から平成2年度中に現場調査のみを実施するものと、平成3年度に調査するものとにわけ、双方の結果を、平成3年度末に報告書として刊行することとし、いずれも、宮田村長伊藤浩を委託者、宮田村遺跡調査会会长友野良一を受託者、宮田村教育委員会教育長林金茂を立会人として、前者は平成3年3月7日、後者と報告書刊行については平成3年5月7日に委託契約を結んでいる。その際、水道工事等によって、すでにかなり破壊されていると判断される工事箇所については、工事への立ち会いにとどめてある。

図2によって調査地点をみると、平成2年度分は、役場と中央グランドの北の、中越北線の道路部分であり、平成3年度に調査したのは、役場と中央グランドの間を北へ入る道と、それから分かれて台地北縁に東と西へ伸びる道路の部分である。

2 調査の組織

今回の遺跡調査にかかる組織と、現場の発掘調査に参加され、実際の作業をして頂いた作業員の皆さんは次のとおりである。

◇宮田村遺跡調査会	◇宮田村教育委員会	◇調査参加者
会長 友野 良一	教育次長 小林 守	伊藤 茂子
委員 宮木 芳弥	係長 古河原正治	浦野 由子
〃 片桐 貞治	係 小池 孝	木下 道子
〃 平沢 和雄		小田切守正
〃 青木 三男		酒井 麗子
〃 伊東 醇一		西村アグ子
〃 唐木 哲郎		原 級
教育長 林 金茂		平沢きくみ
		松下 末春

3 調査の経過

平成2年度の調査は、平成3年3月12日から28日まで実施した。

調査は、下水道課に依頼して調査予定地を通行止めにしたのち、アスファルト舗装の剥ぎ取りから始まり、重機によって碎石層を掘り上げ、その下を発掘した。

その結果、調査した範囲からは、石垣や水路と判断される石積みが検出され、大部分が、旧宮田中学校の校庭や敷地として造成され、縄文時代の造構や包含層は破壊されてしまっていることが明らかとなった。それでも、用地東端の、BM19~21グリッドの旧道路下で破壊をまぬがれた部分に1箇所、役場庁舎北東の、BM06~10グリッド付近の旧道路の南縁と判断される石積みの下に1箇所、縄文時代の包含層が残っている所があり、それぞれ、縄文前期の住居址1軒ずつを検出した。旧中学校建設時の造成工事の痕跡も、記録としては取ったが、全体像がうかがえないこと

もあって、本報告書では、詳述してない。

用地際に置いてあった砂石を埋め戻し、舗装部分を処理業者に依頼して処理して調査は終了した。

平成3年度の調査は、平成3年7月2日から19日まで実施した。ただ、BN11グリッドからBT11グリッドにかけての部分は、奥に工場があり、車の通行を確保する必要があったため、下水道工事に伴う道路拡幅工事の終了をまって、11月8日に実施した。

調査は、BX11～CB25グリッドの線を東から、CA8～CA11グリッドの線を西から、BU11～CA11グリッドの線を北から、BN11～BO11グリッドの線を北から、という順に発掘した。住宅地の中の狭い道路を掘ったわけで、おおむね下水道のマンホールからマンホールの間を一区切りとし、発掘と埋め戻しを繰り返すという方法をとらざるを得なかった。手順としては、用地脇に必要に応じてコンパネとシートを敷いて除土置場を確保し、発掘は、表土部分を重機で掘り上げた後、遺構の検出作業を進め、遺物の出土状態、遺構の形態、土層を1/40の実測図を作成して記録した。

調査の結果、14軒の住居址を検出した。しかし実際は、ごく狭いトレンチによって、遺構の存在を確認したとの感が強い。従って、遺構はもちろん、特に遺物についての分析は、ごく小量のサンプルからの推定の域を出ず、将来残りの部分を発掘した時、本書の見解がくつがえる可能性も否定できない。現状が、砂利を敷いたりごく薄い簡易舗装を施した道路部分ということで、包含層はほとんど動かされてしまっていたが、それによって遺構まで破壊されるという状況にはなかった。なお、役場庁舎と中央グラントの間を北へ入る道路は、もう少し長い区間の調査を予定していたのだが、調査中にかつて消火栓を設置した時に完全に破壊されてしまった部分があることがわかり、そこについては調査していない。

平成3年度は、公共事業に伴うもののほか、工場用地拡張工事に伴う調査が多く、12月初めまで現場での作業が続いた。その後、本報告書など年度内に報告書を作成する必要があるものについて、整理作業を続行し、3月末をもって刊行にいたった。

4 遺物の分類と遺構番号について

(1) 遺物の分類

本報告書における遺物の分類は、「中越遺跡発掘調査報告書」(宮田村教育委員会1990)での基準と呼称をそのまま使用している。特に、縄文前期の土器について用いた記号は本書でもそのまま使用しているので、その部分の概略を記しておくことにする。

○時期区分

I期——縄文前期初頭中越期 II期——縄文前期中葉神ノ木期

○群別

I群——在地系 II群——関東系 III群——東海系

○ I 期Ⅰ群土器の細分

- A : 頂部に刻みをもつ隆帯を横位にめぐらせ、口縁から胴部まで斜格子目文を施す尖底土器。
- B : 口縁から胴部まで斜格子目文を施し、頂部に刺突文を横位にめぐらす尖底土器。
- C : 口縁の4つの突起から刻みをもつ隆帯を垂下し、その間の口縁から胴部まで斜格子目文を施す尖底土器。
- D : 口縁の4つの突起から隆帯を垂下する無文の尖底土器。
- E : 無文の尖底土器で、波状口縁と平縁がある。
- F : 繩文を施す尖底土器。

(2) 遺構番号

中越遺跡における発掘調査によって検出した住居址は、昭和59年の、商工会館建設用地の第14次調査までは、一部に欠番はあるものの、一連番号を付して整理されていた。しかしその後の調査では、西原土地区画整理事業に伴う調査、個人住宅建設に伴う調査など、その時々で1から始まる一連番号を付すという方法をとってしまった。せめて、報告書刊行時に整理し、番号の重複をさける方法をとればよかったのだろうが、それもしなかったため、西原土地区画整理事業に伴う第1次・第5次発掘調査、第10次発掘調査の報告書で、それぞれ1から始まる番号が住居址に付されるという事態をまねいてしまったのである。

そこで今回、第14次調査より後の調査によって検出した住居址を整理し、発見順に第14次調査の最終番号に統けて一連番号を付すこととした。それによると、報告書として公表されたものうち次の住居址は、右に記したもののが最終的な番号ということになる。この場を借りて訂正し、お詫びする次第である。

○「西原土地区画整理事業第1工区 第1次発掘調査報告書」(1987)

- | | |
|---------------|---------------|
| 1号住居址→108号住居址 | 3号住居址→110号住居址 |
| 2号住居址→109号住居址 | |

○「西原土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第5次」(1989)

- | | |
|----------------|----------------|
| 15号住居址→122号住居址 | 16号住居址→123号住居址 |
|----------------|----------------|

○「西原土地区画整理事業第1工区 第11次発掘調査報告書」(1991)

- | | |
|---------------|---------------|
| 1号住居址→147号住居址 | 4号住居址→151号住居址 |
| 2号住居址→149号住居址 | 5号住居址→152号住居址 |
| 3号住居址→150号住居址 | 6号住居址→153号住居址 |

また、遺跡地には、昭和53年に10m方眼のグリッドが設定されており、今回もそのメッシュを使ったが、地区的呼称は、グリッド設定当時のものではなく、「中越遺跡発掘調査報告書」(宮田村教育委員会1990) のものを使用した。



図3 平成2年度調査区範囲全体図

第2章 遺構と遺物

第1節 平成2年度調査結果

I 縄文前期の遺構と遺物

(I) 154号住居址

BM19・20グリッドに検出された。中越北線の道路工事の際、掘り込み面より下まで削平されているほか、転圧されて埋土を含めた全体が堅くなっているが、本来のものが、圧縮されて保存されているとみていい（図4）。

調査は、方形もしくは隅丸方形になるであろう住居址の中央に、軸線に沿ってトレンチを入れたといつてよく、全体形については、1辺が3m20cm程あることと、軸線が北からわずか東へ傾くことがわかる程度である。ほぼ中央に深さ40cmのピットがあるが、柱穴とは断定できない。周溝はないともみていいだろう。埋土はやや赤みがかった褐色土である。

遺物はごく少ないが、土器には、Ⅰ期Ⅰ群の無文部の小破片と共にⅠ期Ⅰ群Aの大破片（図

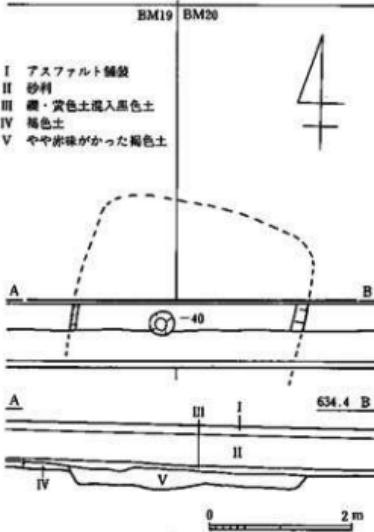


図4 154号住居址実測図

6-1) が出土しており、埋土の色からも、掘り込みの浅い前期初頭の古い時期の住居址である可能性が高い。他に黒曜石の剝片類数点が出土している。

(2) 155号住居址

BM08グリッド東寄りに検出された。上層には、旧中学校やその周囲の施設となる石積みがある(図5)。図にあるのは道路南縁の石積みで、その南に溝があり、発掘の際掘り上げてしまったが、さらにその南に旧中学校用地の北限となるであろう石積みがあった。土層図にみられるように、石積みの下に鉄分の沈殿した灰色がかかった黒色土があり、水田耕作土ではないかと考えたのだが、あるいは、川底の土であるのかもしれない。住居址は、IV層下の褐色土上面で検出されたが、構築時住居の掘り込みは、もっと深かったのである。埋土には炭が混じっている。

調査した範囲は、平面形が方形に近いものと推定される住居址のはば中央のトレンチ状の部分だけであり、1辺が約3.5mであることと軸線が北からわずか東に傾いていること以外、全体形については知ることができない。周溝が壁下をめぐり、東壁下に深さ30cmのピットがある。ほぼ中央と推定される部分は、床面より下まであらたに破壊されていた。

遺物はごく少ない。土器は約20点で(図6-3~5)、II期I群が3点あるものの主体はI期I群の無文土器であり、前期初頭の新しい時期の住居址であるとしておきたい。他に黒曜石の剝片類が数点ある。

2 繩文中期の遺物

前述したように今回の調査地点は、縄文時代の包含層を旧中学校のグランド造成時に切り取ってしまった範囲が多く、それ以外でも、現在の道路工事によって、包含層の大部分が削平されていたが、BM18-20グリッドから縄文中期初頭の土器片(図6-12~14)が出土しており、東方の台地中央に見られた縄文中期初頭の包含層が、少なくともこのあたりまで広がっていることを示す資料として注意される。

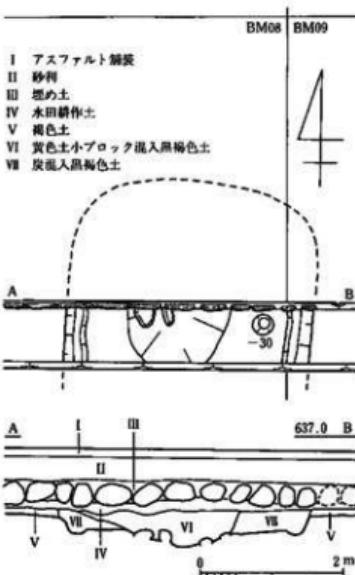


図5 155号住居址実測図

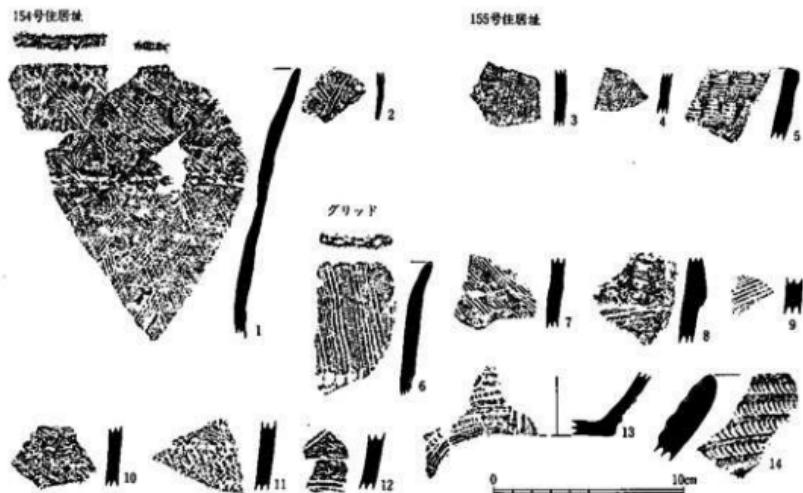


図6 154・155号住居址、グリッド出土土器拓影

3 その他の遺構

旧宮田中学校の施設については、今回の調査の目的でなく、いわば搅乱の痕といったものではあるが、地表下の状況を知ることは、今後の調査の要否を判断する上で参考になると考え、わかる範囲で記しておく。

現中央グランド北側は観覧席のような階段状の石積みとなっている。東端はBM18グリッドから始まり、BM11グリッドで弧状に南へと回り込んでいるので、石積みは、高い所で3段まで確認された。BM13グリッドの西寄りには、上面の平坦な、方形の面をきっちりと組んだ部分がある。石段の一部であろう。発掘したラインは、石積みの上端とほぼ一致する。

役場庁舎北側のBM06グリッドからBM10グリッドの中間までは、旧中学校と道路との界にあたり、それより西の調査地点は道路の下になる。

第2節 平成3年度調査結果

I 繩文前期の遺構と遺物

(1) 166号住居址

CB19グリッドに検出された。北西に軸線をおく、1辺3~4mの丸みをもった平面形の小形の住居址が想定される。周溝はなく、柱穴もみつかっていない。壁下を除く床面は、粘土質の黄色

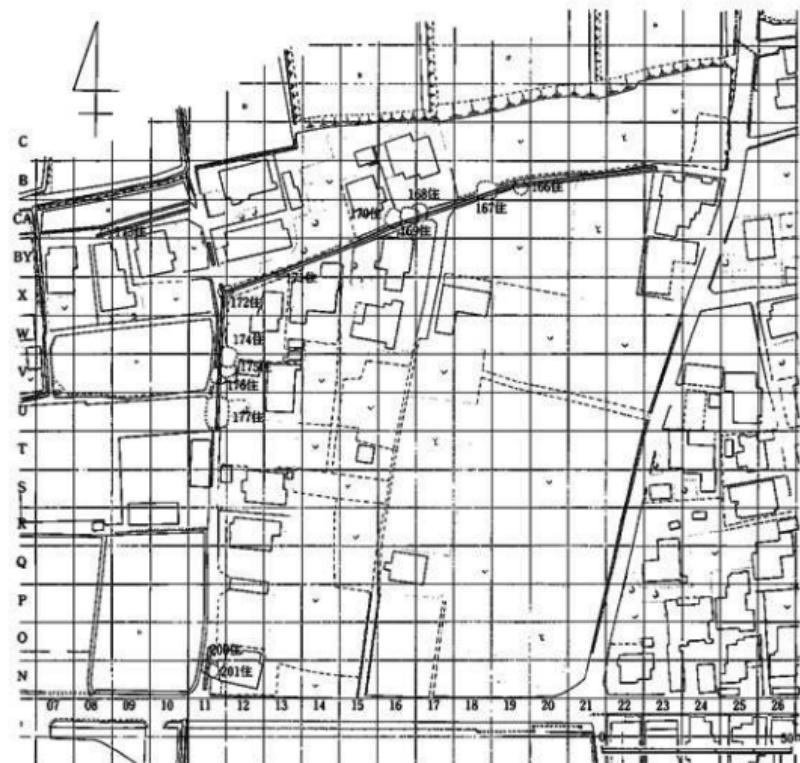


図7 平成3年度調査区遺構全体図

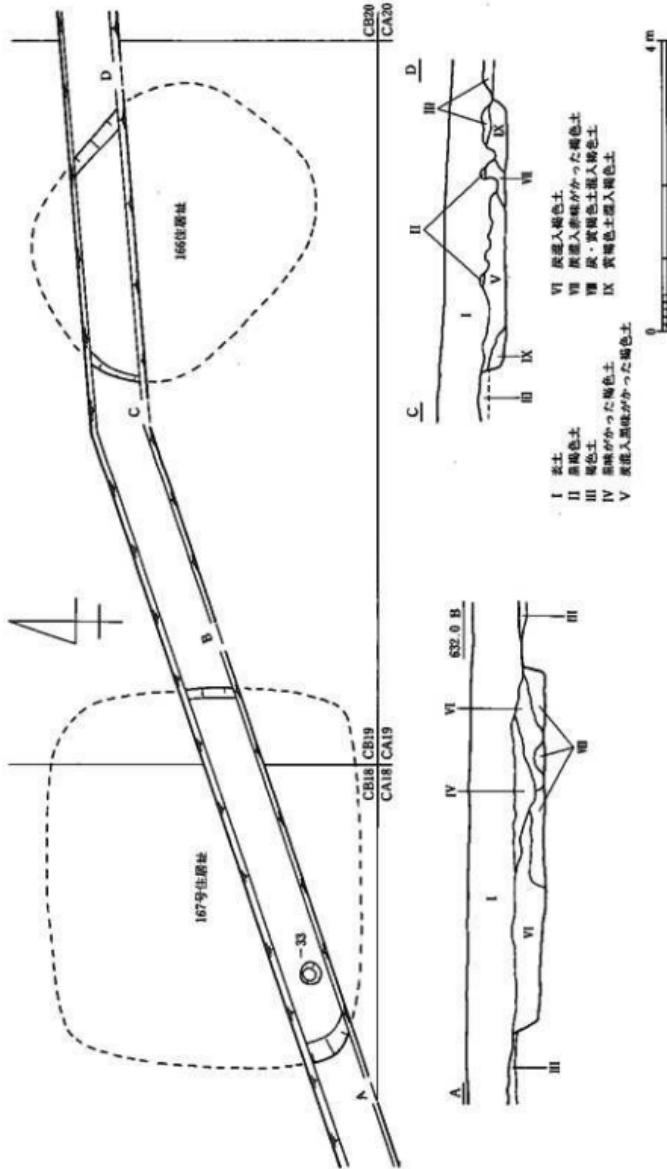


図 8 166・167号住居実測図

土によって貼られている(図8)。

遺物はごく少なく、20点の土器片は、Ⅰ期Ⅰ群A2点、斜格子目文5点、無文18点となっている(図17)。図17-1は、同9と共に167号住居址から出土したⅠ期Ⅰ群A(図9)と接合する。石器は、敲打器1点(図24)のほかは少量の黒曜石の剥片のみである。

埋土の色や住居址形態、遺物から、前期初頭の古い時期の住居址としておきたい。

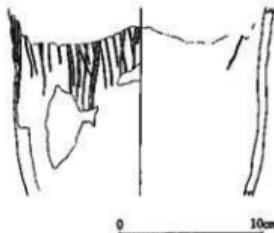


図9 167号住居址出土土器実測図

(2) 167号住居址

CB18・19グリッドに検出された。東西に軸線をおく、1辺5m程の、平面形が隅丸の方形もしくは長方形の住居址と想定される。埋土には、上層に黒味がかった褐色土がレンズ状に入り、下層には、床面から少し浮いた壁ぎわに焼土が、全体に比較的大きな木炭がみられた。周溝はなく、南西隅の柱穴としていいピットが1つみつかっている。床面には粘土質の黄色土が貼られていた(図8)。

遺物は調査面積からすれば多く、160点の土器片には、図9のⅠ期Ⅰ群Aの大破片のほか、Ⅰ期Ⅰ群のA8点、斜格子目文37点、無文部89点などがある(図17)。石器は、打製石斧、叩石、礫端叩石各1点(図24)のほかは、黒曜石の剥片類13点である。

埋土上層に黒味がかった褐色土がレンズ状に入っていることと、Ⅱ期Ⅰ群土器がわずかながら上層に混入していること、方形に近い平面形が想定されることなどから、前期初頭の新しい時期の住居址であろう。

(3) 168・169・170号住居址

CA16から17グリッドに検出された切りあう3軒の住居址で、調査によって、168号住居址の西側を169号住居址が切っていることが判明し、さらに169号住居址は、170号住居址の一部をも切っているものと想定した(図10)。

168号住居址の規模や平面形は、調査した範囲からは特定できなかった。周溝があり、その内側、すなわち東壁下の床面は、黄色土小ブロックと小石の混じる褐色土によって埋め立てられており、そのほかの床面も、粘土質の黄色土によって貼られていた。169号住居址は、北からやや東寄り方向に軸線をおく、1辺4~5mの丸みをもった方形の平面形が考えられる。埋土には、上層にレンズ状の黒色土がはいり、その直下の西側に黄褐色土混入褐色土が、床面直上には炭・焼土粒・黄色土粒の混じる褐色土がある。狭い範囲の調査のため確証はないが、周溝がめぐるのかかもしれない。床面には粘土質の黄色土が貼られ、小形のピット1つがみつかっている。170号住居址の平面形もまた丸みをもった方形に近く、北東方向に軸線をおくかと思われるが、規模は特定

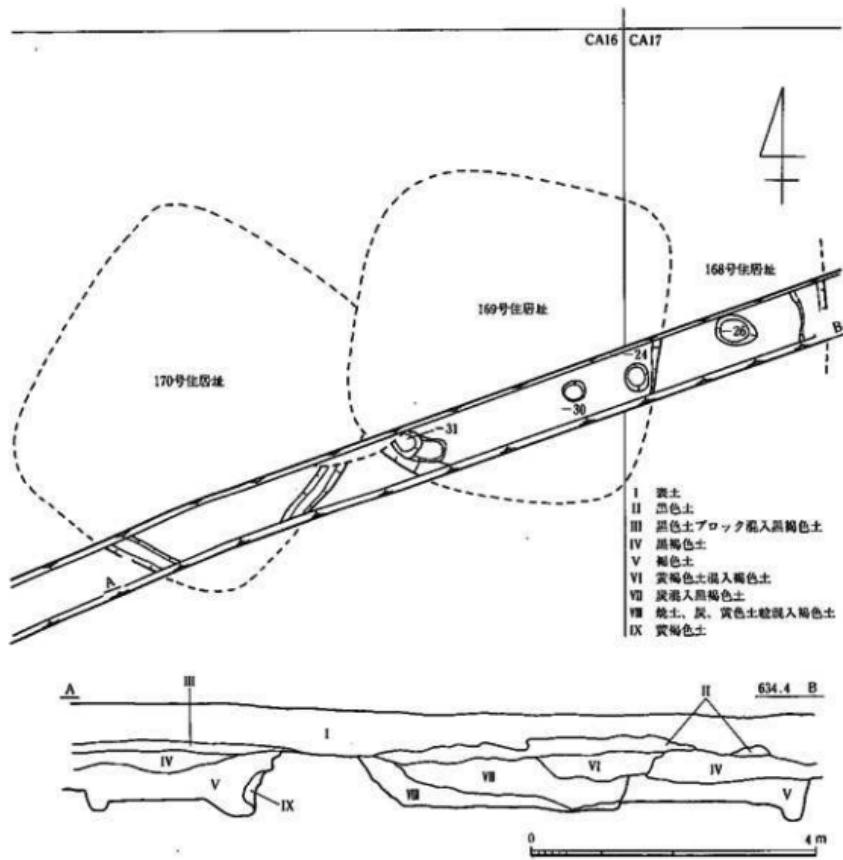


図10 168～170号住居址実測図

できない。壁下を深い周溝がめぐり、床面には粘土質黄色土による貼り床が顕著にみられた。

遺物は、168号住居址から105点、169号住居址から81点、170号住居址から89点、の土器片が出士している（図18・19）。全体的にみると、I期Ⅰ群AやBの口縁部や、それに由来する斜格子目文の割合が3割を超え、I期でも古い土器群ということができる。そして、169号住居址の資料は、斜格子目文の割合が最も低いこと、唯一、II期Ⅰ群土器が混入していることから、3軒の中では最も新しい傾向にあることが指摘でき、遺構検出時の切りあい関係についての所見を裏付けている。一方、170号住居址からは、I期Ⅰ群Aの口縁部大破片や同AかBのものと考えられる胴下半部の半個体分が出土しており（図11）、最も古い印象を受ける。

石器は、168号住居址から黒曜石の剥片類10点、169号住居址から打製石斧・石匙・スクレバー各1点と黒曜石の剥片類11点、170号住居址からスクレバー・叩石各2点、部分磨製石斧・砾端叩石各1点と黒曜石の剥片類14点が出土している（図24・25）。

遺物は前期初頭でも古い時期の傾向を示しているが、遺構の構造がしっかりしている点は前期初頭でも新しい時期の特徴であり、そのあたりは残された部分の発掘によって解明されよう。

前期初頭の住居址群とのみしておきたい。なお、調査範囲北壁の169号住居址と170号住居址の間に、遺構検出面から30cm上まで、人頭大の砾が集中してみられた（図の破線部分）が、検出した遺構との関連性の有無や性格、所属時期は明らかでない。

(4) 171号住居址

BY13グリッドに検出された。平面円形の径2mほどの小形の住居址であるが、褐色の埋土中には人頭大からさらに大きな砾が多数あり、床面も軟らかくて柱穴や貼られた痕跡もないことから、住居址ではない可能性も否定できない（図12）。

遺物は土器片23点のみで（図19）、I期Ⅰ群の無文部が大多数を占める。

遺構の所属時期を特定するのは難しいが、形態から、住居址とすれば前期初頭の古い時期のものであろう。

(5) 172号住居址

BX11グリッドに検出された。調査した部分から推定すると、平面形は 6×4 m程の長方形となる。狭長であり、他の住居址とかなり異なるのだが、東西方向と南北方向を2回に分けて調査し

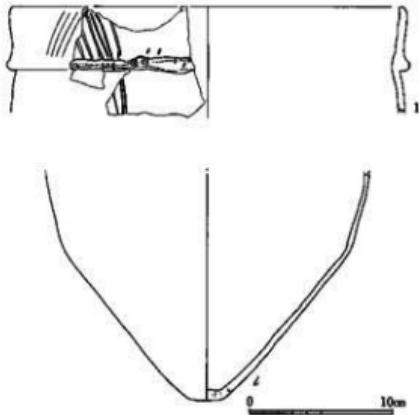


図11 170号住居址出土土器実測図

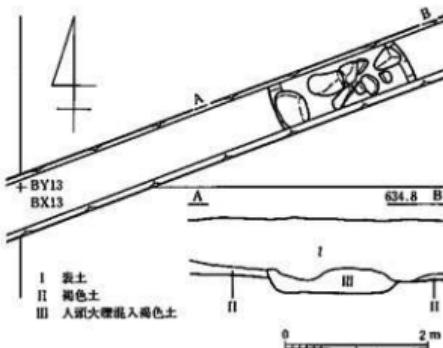


図12 171号住居址実測図

ており、あるいは、推定に無理があるのかもしれない。検出面から床面までは深く、埋土下層の壁下には、床面から少し浮いた位置に焼土が見られた。南壁下に周溝があり、東壁下まで続く可能性もある。床面には、粘土質の黄色土が貼られている（図13）。

遺物はやや多い。98点の土器片は、I期Ⅰ群の無文部が7割を占め（図20）、168～170号住居址あたりと比較すると無文部が多い。石器は、石錐1点、叩石2点（図24・26）のほか、黒曜石の剥片類4点が出土している。

前期初頭の新しい時期の住居址であろう。

(6) 173号住居址

台地北縁のCA11グリッドに検出された。検出面から床面までは浅く、埋土中に焼土が見られた。僅約3mの平面円形の住居址と推定されるが、周溝やピットはみつかっていない（図14）。

遺物はごく少なく土器のみで、I期Ⅰ群22片、須恵器1片である。形態から、前期初頭の古い時期の住居址としておきたい。

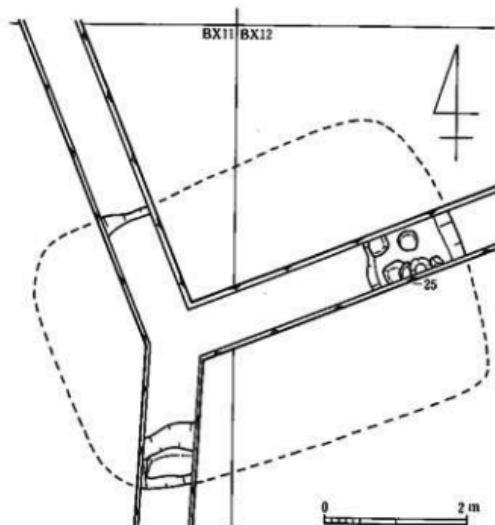


図13 172号住居址実測図

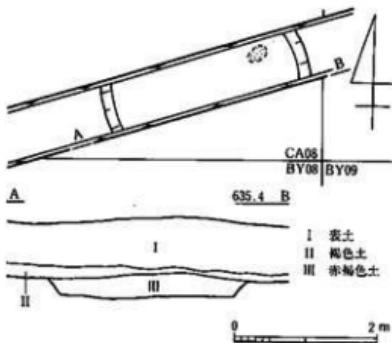


図14 173号住居址実測図

(7) 174・175・176号住居址

BV・W11グリッドに検出された。床面の高さがほぼ同じの切りあう住居址で、175号住居址を176号住居址が切り、174号住居址は176号住居址の周溝や床の上に、貼り床して構築されているものと判断した。3軒の住居址は、古い順に175号住居址→176号住居址→174号住居址ということになる（図15）。

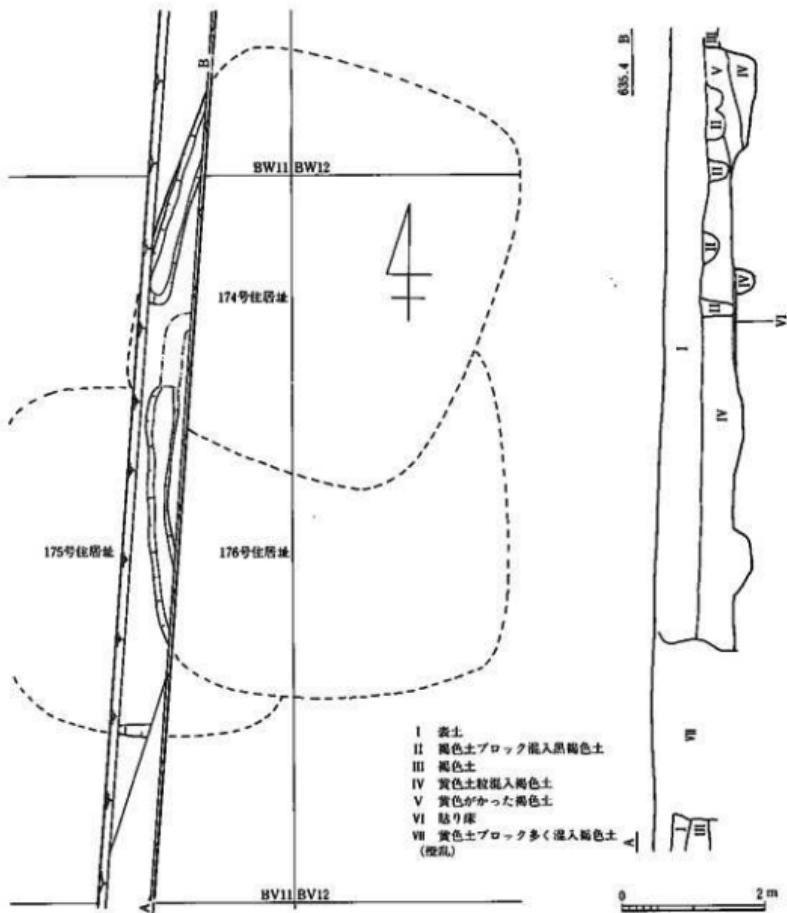


図15 174~176号住居址実測図

174号住居址は、軸線が北から少し東へ傾いた、方形もしくは隅丸方形の平面形になるものと考えた。南壁については、175号住居址の周溝や床上への貼り床が切れるあたりが、174号住居址の周溝内側の位置に相当するものとしたのである。埋土は、北壁ぎわに黄色味をおびた褐色土が見られるほかは黄色土粒の混じる褐色土で、175・176号住居址の埋土との区別はできなかった。西壁下に周溝がある。厚さ3cmほどの貼り床部分も含めて、床面には、粘土質の黄色土が貼られていた。175号住居址は、ほぼ南北に軸線をおくものと推定される以外は、平面形や規模、174・176号住居址との位置関係はわからない。南壁下の埋土下層に、床から少し浮いて焼土がみられた。

周溝はなく、床面には粘土質の黄色土が貼られている。176号住居址の平面形は、検出できた住居の西壁から、1辺5m強の、南北に軸線をおく丸みをおびた方形になるものと推定できる。埋土の観察結果では、174号住居址によって切られた状況は見いだせなかった。壁下を周溝がめぐっている。

遺物は、出土地点の記録を遺構実測図と重ねあわせて出土遺構を決定したのだが、住居構築時に、すでに廃絶していた住居の掘り方に埋まっている古い遺物を含んだ土を動かしたこと、当然あったものと考えられ、調査範囲が狭いこと、出土遺物が少ないとあわせると、そのような方法で得た遺物群をもとに分析を進めても、有意な結論は出そうもない。それでも、174号住居址61点、175号住居址35点、176号住居址38点の土器片（図20・21）をみると、I期のうちに占める斜格子目文の割合が、174号住居址が1割未満なのに他は2割を超えており、その点では174号住居址が最も新しいことが言え、発掘時の所見を裏付けている。石器は、174号住居址からスクレバー、175号住居址から石鏃と叩石がいずれも1点出土している（図24）ほかは、ごく少量の黒曜石の剝片類が出土したにすぎない。なお、175号住居址にII期の土器が6片と比較的多いのは、南にあるII期の住居址に由来するものであろう。

遺構と遺物からみた所属時期は、同じく3軒が切りあっていた168～170号住居址の状況と似ており、遺構は、掘り方のはっきりした前期初頭でも新しい時期の特徴を備えているが、遺物は、174号住居址以外はより古い時期である感が強い。ここでは、前期初頭の住居址群であるとするにとどめておきたい。

(8) 177号住居址

BU11グリッドに検出されたが、用地の大部分が、消火栓埋設工事の際に破壊されてしまった部分と重なったため（図16）、トレンチ状の調査区の東壁に、住居址の落ち込みと数cmの幅の床面を検出したのみであった。南北の壁間の距離が8mあり、南北

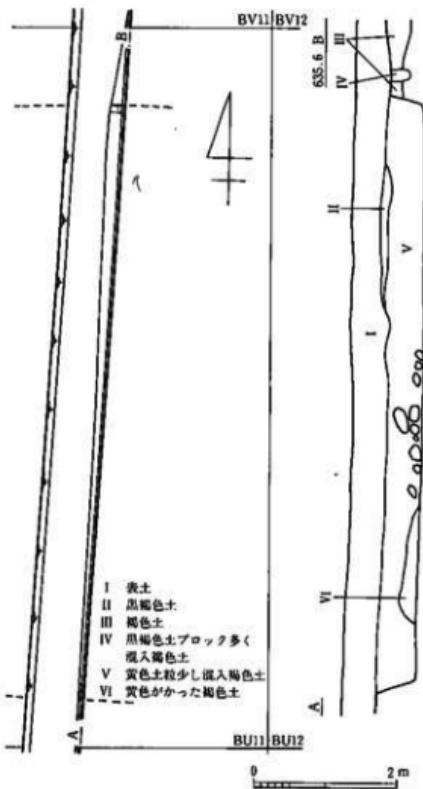


図16 177号住居址実測図

に長軸線をおく平面長方形の大形の住居址である可能性もある。中央の埋土下層には、レンズ状に人頭大の礫が入り込んでいる。

調査範囲にはごくわずかしか保存されていなかったけれど、埋土中の遺物量は多く、約240点の土器片のうち、7割以上がII期I群であり（図21・22）、今回調査した他の15軒の住居址とは、明らかな時期差がある。石器は、3点の叩石と、石鎌・石匙・スクレバー・打製石斧・礫端叩石各1点（図24・26）の他、若干の黒曜石剝片類が出土している。前期中葉の住居址である。

(9) 200・201号住居址

BN11グリッドに検出された切りあう住居址で、200号住居址を201号住居址が切っている。東側をやはり消火栓埋設工事によつて破壊されていたため、調査範囲にはわずかな部分しか残されていなかつたが、旧い方の落ち込みの中央に粘土質黄色土の貼り床があることから、住居址とした。周溝や柱穴はいずれも見つかっていない。平面形についても、201号住居址の検出部分が、北東方向に軸線をおく方形に近い住居址の西隅であろうといえる位である（図17）。

遺物もごくわずかで、土器は201号住居址からI期I群の無文片が4点のみ、石器類は黒曜石の剝片類が1点ずつ出土しているにすぎない。

所属時期を特定するのは困難だが、形態的には前期初頭の特徴を備えていよう。

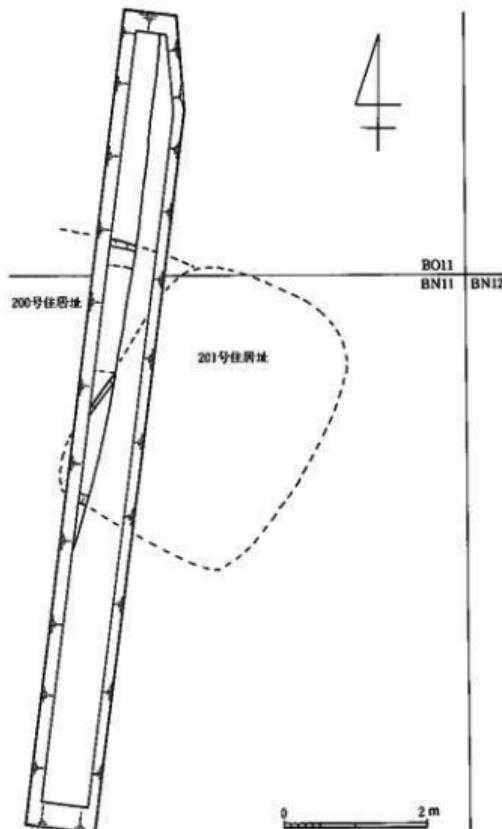
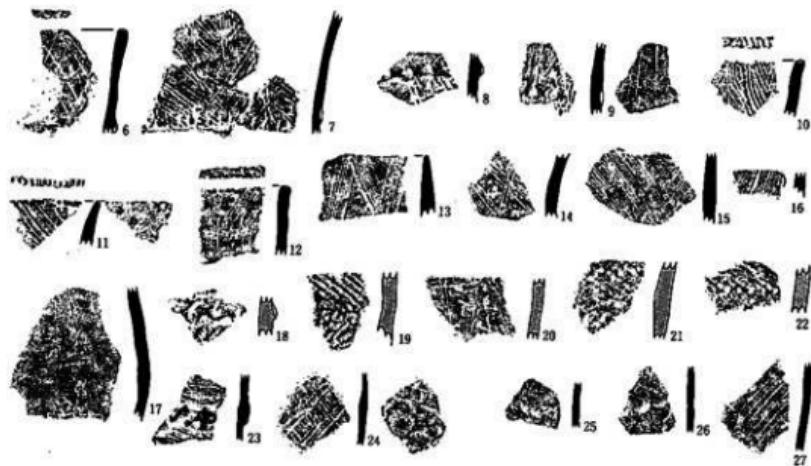


図17 200・201号住居址実測図

166号住居址



167号住居址



168号住居址

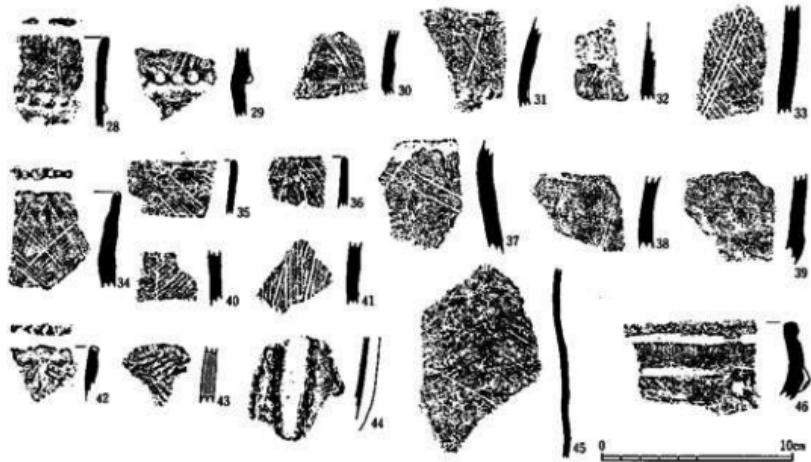
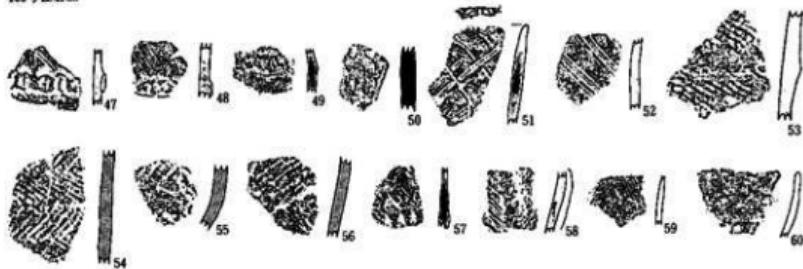
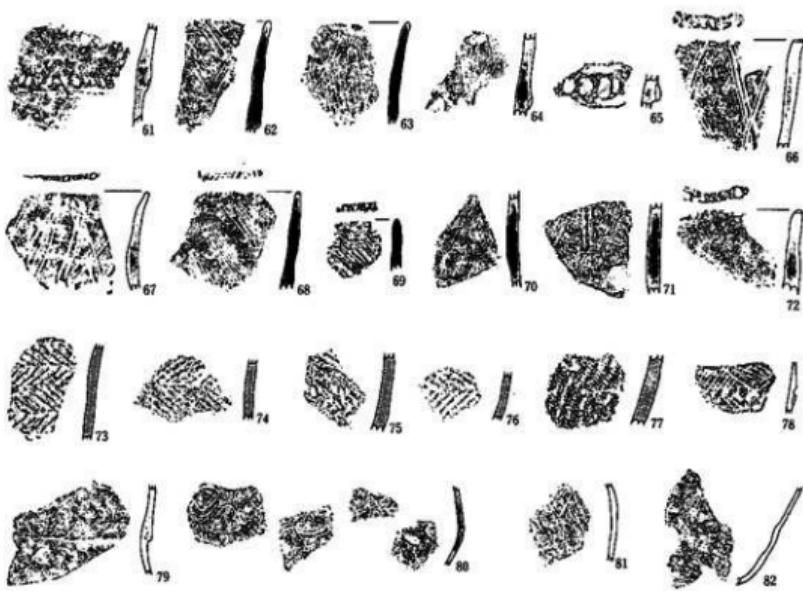


图18 166~168号住居址出土土器拓影

169号住居址



170号住居址



171号住居址

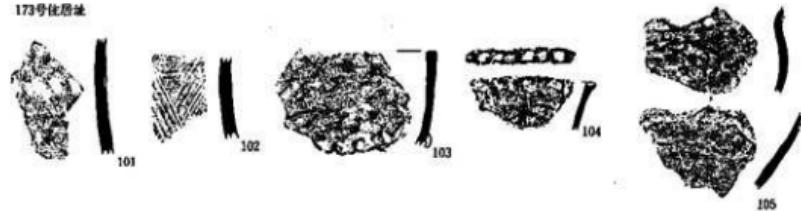


图19 169~171号住居址出土土器拓影

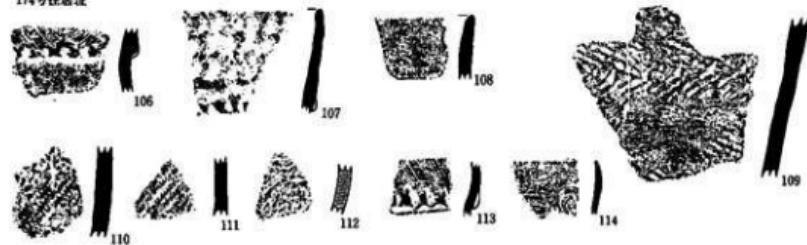
172号住居址



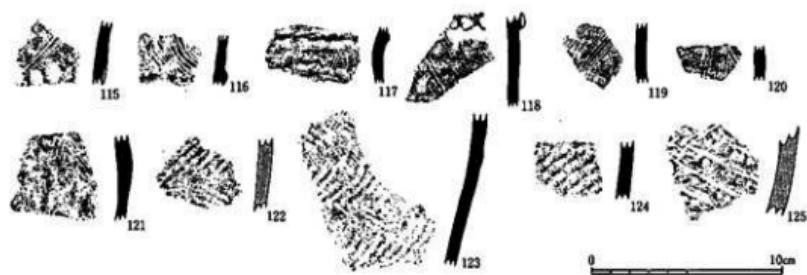
173号住居址



174号住居址



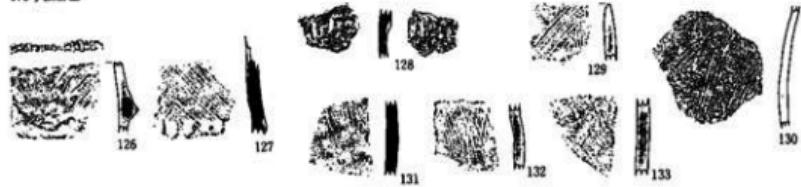
175号住居址



0 10cm

图20 172~175号住居址出土土器拓影

176号住居址



177号住居址(I)

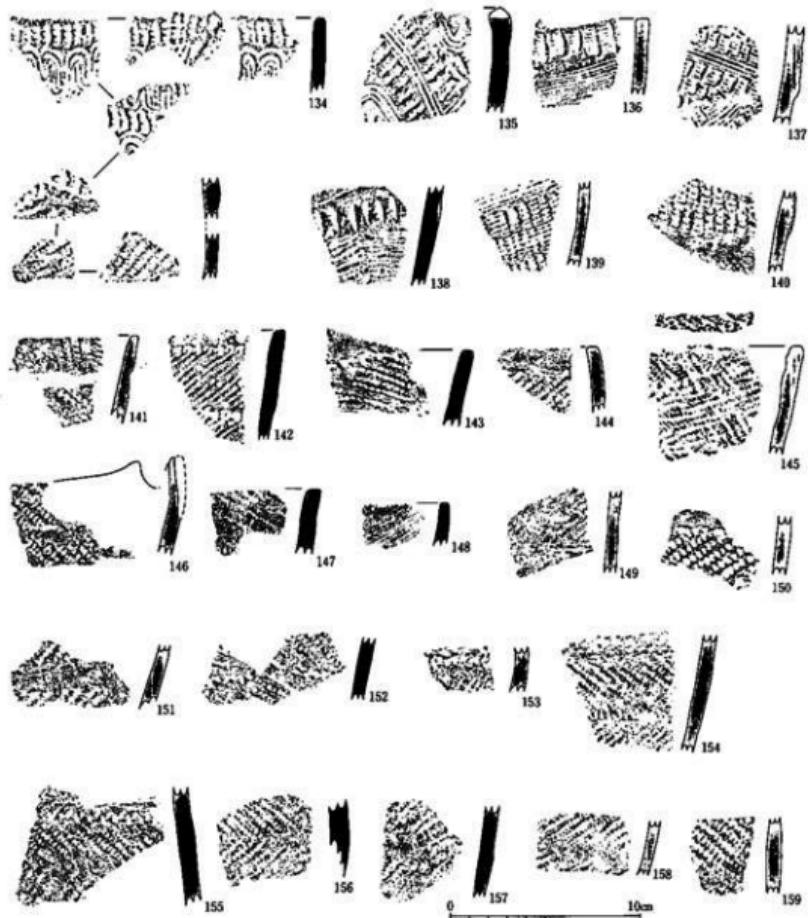


图21 176·177号住居址出土土器拓影

177号住居址(2)

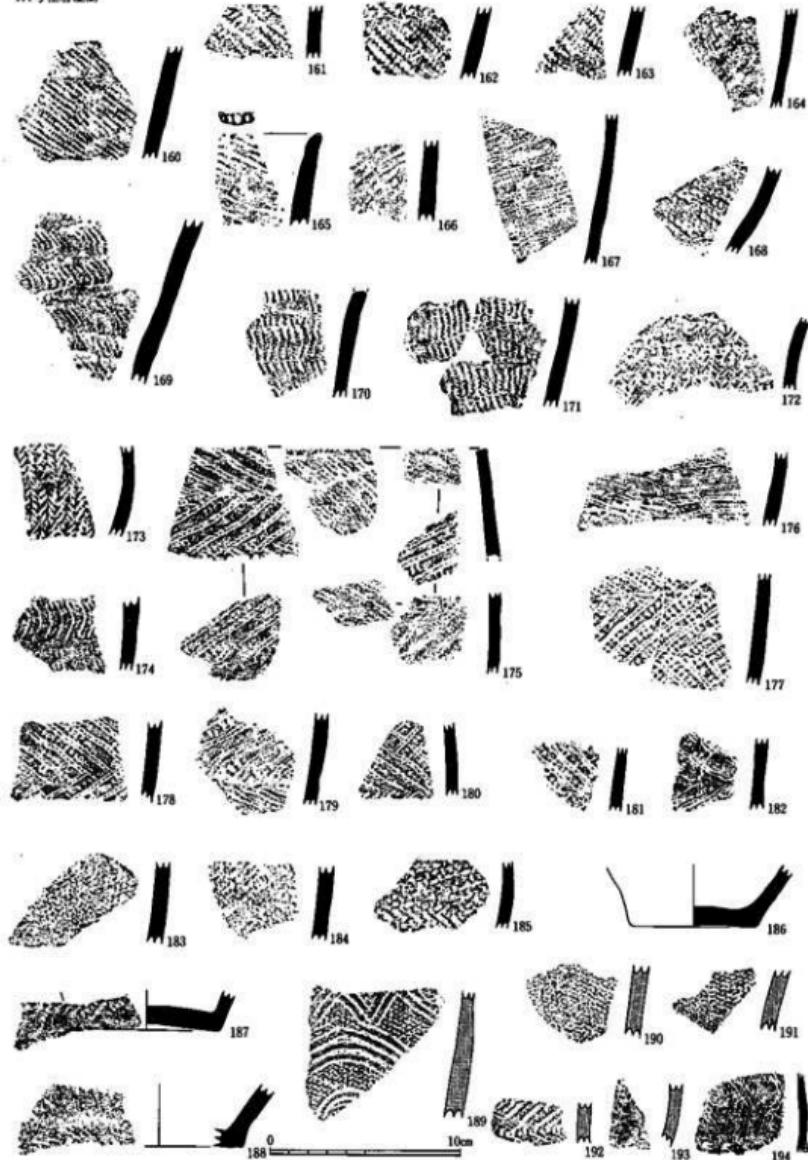


图22 177号住居址出土土器拓影

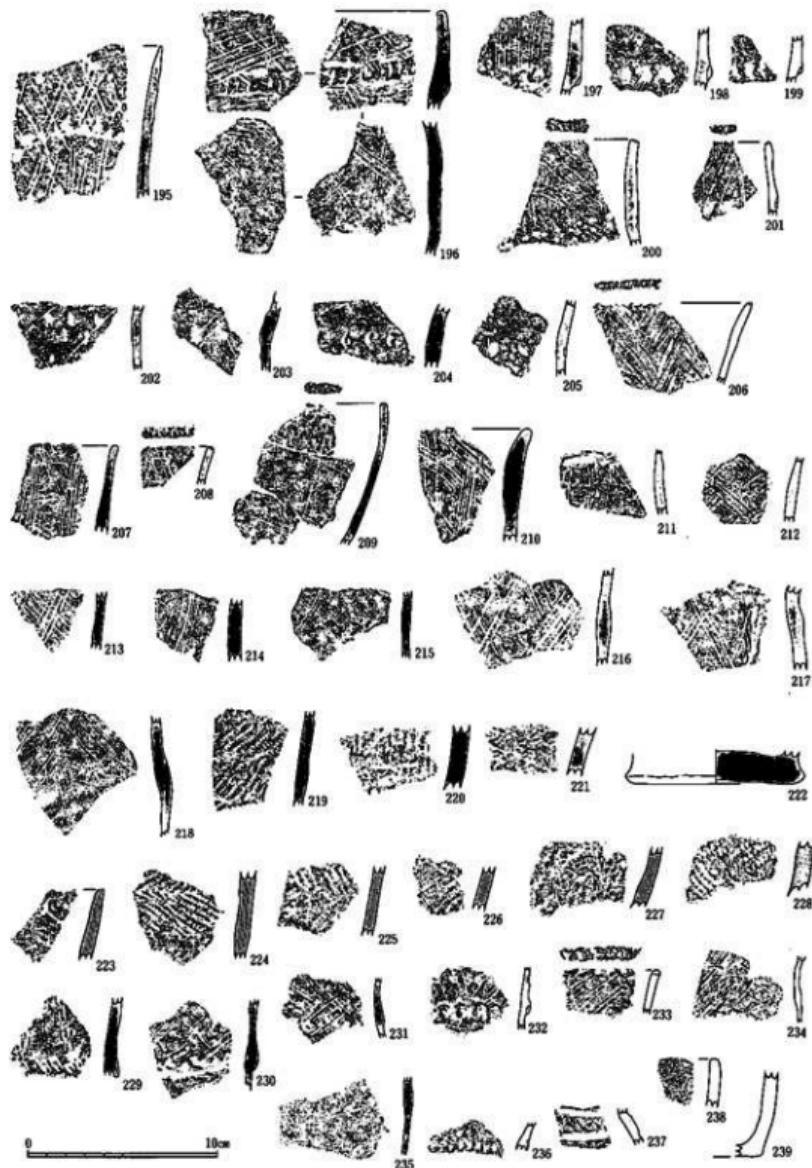


図23 グリッド出土土器拓影

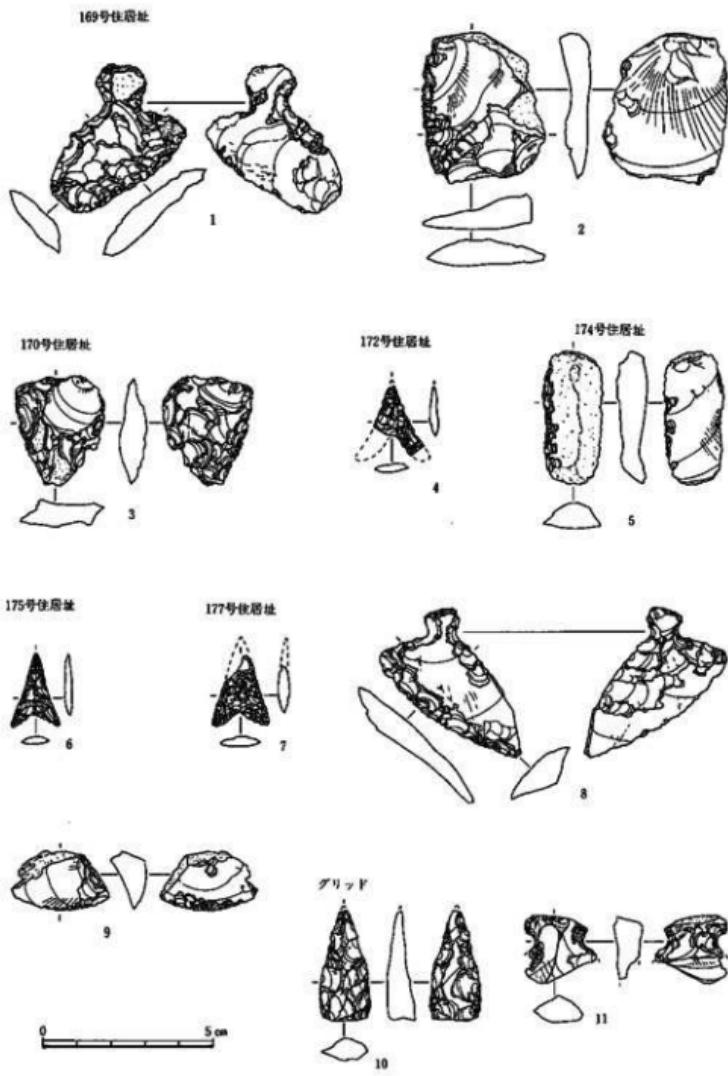


図24 169・170・172・174・175・177号住居址、グリッド出土小形石器実測図

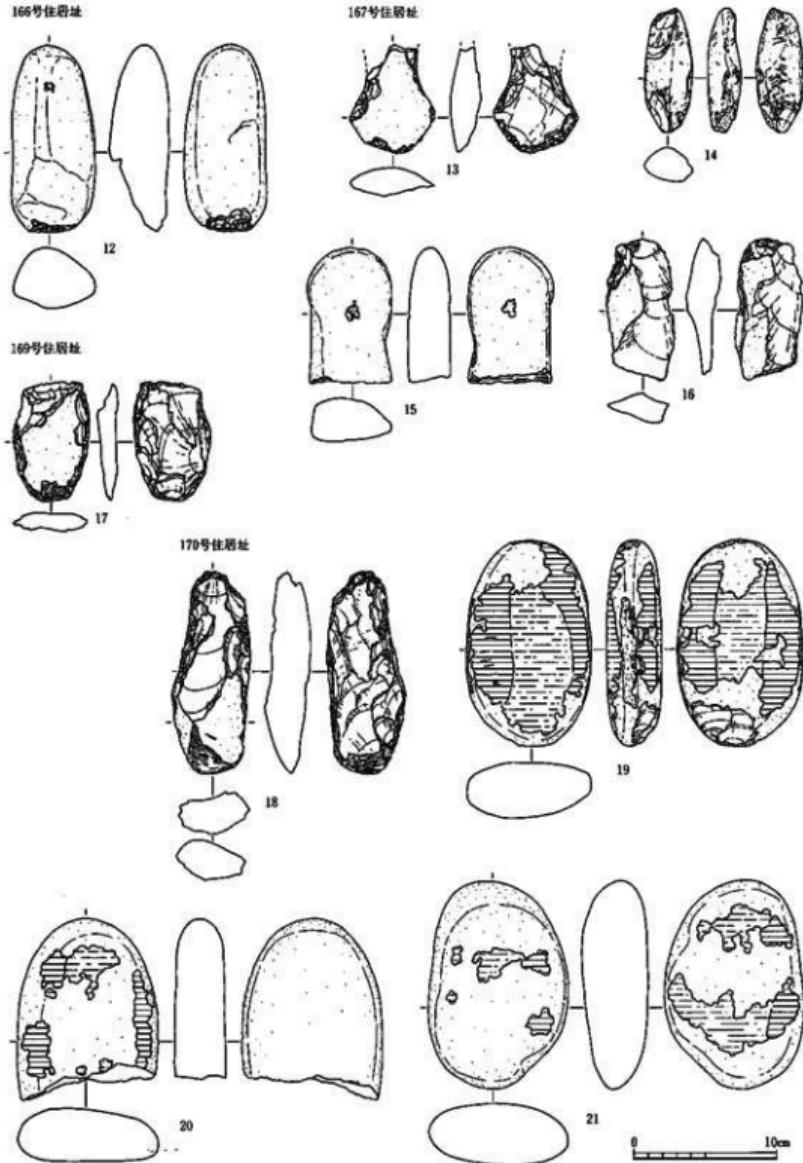
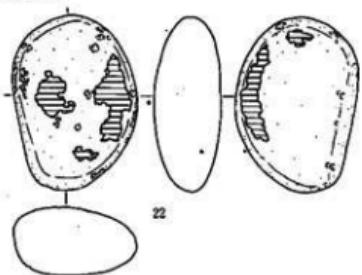
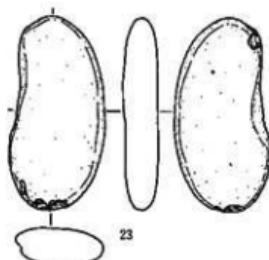


图25 166·167·169·170号住居址出土石器实测图

172号住居址

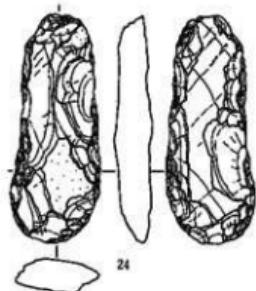


22

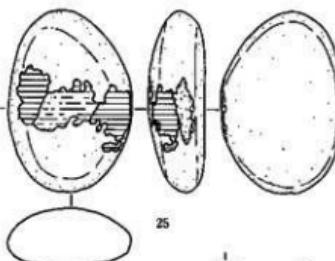


23

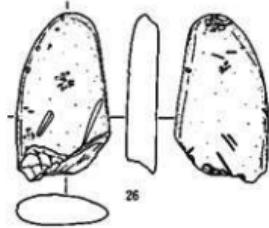
177号住居址



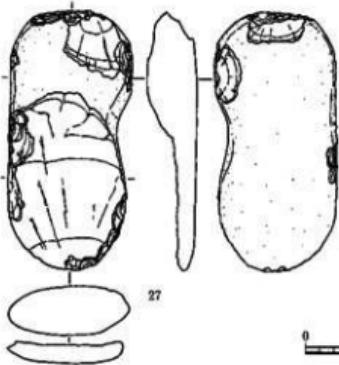
24



25

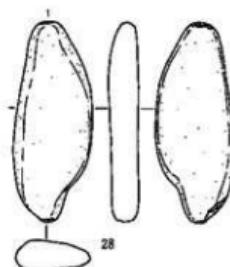


26



27

0 10cm



28

图26 172·177号住居址出土石器实测图

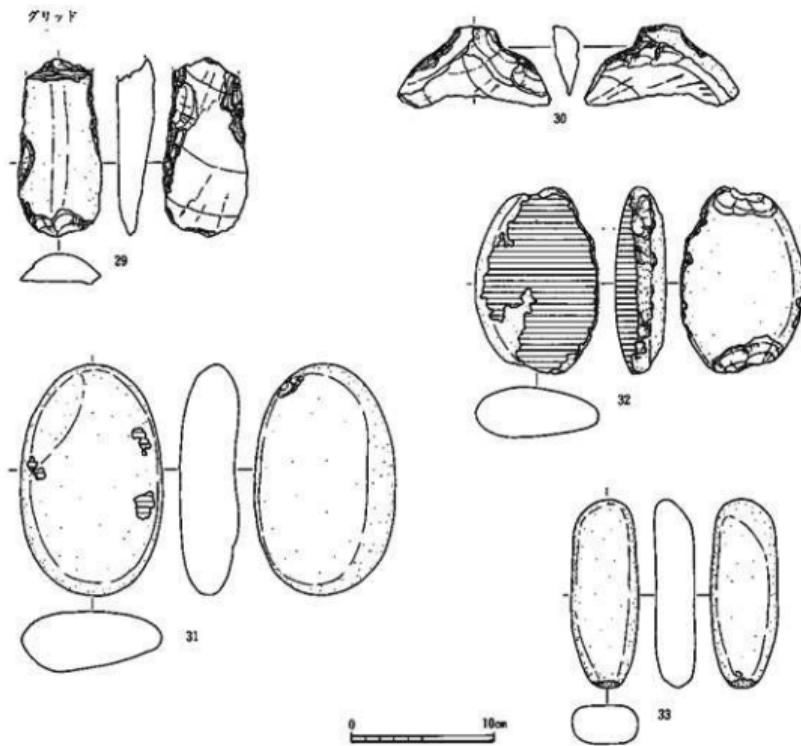


図27 グリッド出土石器実測図

2 遺構外の遺物

耕作等により、遺物包含層は大部分が表土化しており、重機によって表土部分を取り除いてしまうと、遺構埋土以外から出土する遺物の量は少ない。それでも、168号住居址から170号住居址の周辺や、172号住居址と174号住居址の間などから、それぞれ約60点ほどになるまとまった量の土器片が出土しているが、両者とも、その半数がⅠ期Ⅰ群土器の無文部、3割強がⅠ期Ⅰ群A・Bと斜格子目文になっており、両地点の土器群に時期差はみあたらない。全体に、Ⅰ期の古い時期の遺物が散在しているとしていいだろう。

縄文前期以外では、縄文後期の土器片（図23-237）や内耳土器（238・239）がわずかある。

第3節 発掘調査の成果

今回の調査は、経過で述べたように幅1mに満たない狭長な用地を発掘するというものであつたため、縄文前期初頭の住居址15軒、前期中葉の住居址1軒を検出したものの、個々の造構については、充分な検討を加えられるほどの資料を得るには至らなかった。しかし、結果として今回の調査が、すでに縄文前期の集落が展開していることが明らかとなっている地点を中心とした広い範囲に、細長いトレンチを入れた形となつたため、集落の広がり等について、一定の成果を得ることができた。

1 縄文前期の集落

15軒検出した住居址とともに縄文前期初頭の集落についてみると、北側は、調査地の西半分は台地北縁まで集落が広がるが、東方は、縁辺よりもかなり内側で住居址は途切れ、北東方向から北へと傾斜する一帯までは集落は広がらないようである。一方、南側の中越北線よりも南側では、役場庁舎建設に伴う調査で1軒の住居址が検出されたほかは、以前に、中学校のグランド造成時に住居址をいくつか破壊してしまったことがわかっている程度であったが、今回、中越北線上のグランド北東隅近くから住居址が検出され、従来の、役場庁舎北端から中央グランド北東隅を通る東北東方向の線が集落の南縁であるという推定を否定するものとなった。国道から東側での集落の縁辺は、役場庁舎付近と台地北端を南と北の端とし、中越北線の北にみえるごく低い尾根の上の標高630mあたり(BV36グリッド付近)まで、舌状に広がっているのであろう。さらに、古い時期には住居が間隔をおいてまばらに広がり、前期中葉の集落は初頭の集落域の南西部に凝縮するように集中する姿を、今回の調査は再び見せてくれた。

2 胎土に石英粒を含む土器について

かつて「中越遺跡発掘調査報告書」(1990)の分類で、II期Ⅰ群Dとした纖維を含む土器の中に、「胎土に石英を含み、内面の横位ナデ痕が顯著で、羽状縄文を整然と施す」一群があった。石英が透明で大粒、量も多いこと、施文が深くはっきりしていることから抽出が容易なこの土器の所属時期については、当時から、中越遺跡の出土状態からは決定することが難しく、最終的には考察の中で、I期の古いものに伴う土器であると訂正したのだが、今回の調査の結果は、その考察の中での結論を裏付けるものであった。すなわち、今回検出したI期の住居址の多くが、II期の土器の分布域から外れている状況の中で、168号住居址から4点、169号住居址から2点、166・171・174～176号住居址から各1点が出土し、II期Ⅰ群土器が主体の177号住居址からは、1点も出土しなかつたのである(本書の拓影図版では、断面に斜線を引いて区別してある)。

前期初頭でも古い時期の土器群に、客体として混在する土器である。

第3章 結語

中越遺跡の調査と保存の経過

中越遺跡は、縄文時代前期初頭の遺跡として、中部山岳地帯における重要な遺跡である。この中越遺跡は昭和30年代に発掘調査が始まり、今日迄30余年にわたり調査研究が続けられてきたことも、日本考古学史上特記すべきことである。それだけに中越遺跡に課せられた研究課題も多く重要である。そのなかでも、縄文前期初頭における土器型式の編年問題は特に大きな問題点の一つである。そのほか、この時期における住居址の形態の研究、そして、集落の分布範囲の確定、それと、土器型式群における遺構のあり方、それから、それら遺構と空間地帯のあり方など多くの問題をかかえてきた遺跡である。この間、村当局としては、遺跡内の土地利用の問題、住宅建設、道路、下水道設置の問題等文化財保護とのはざ間にあって、伊藤村長をはじめ林教育長、文化財保護審議会などが中心となり、何とか地権者の同意を得、曲りなりにも今まで最大限の遺跡保存に勤めてきた。これ等村あげての努力があってこそ、今日の中越遺跡は守られてきたのである。また、このかけには、長野県考古学会の中越遺跡保存対策特別委員会の協力も忘れてはならない事項の一つである。

こうした長年にわたる調査研究で得られた成果のなかの二、三問題点を記し、結語としたい。

- 1 中越遺跡のうち縄文前期の分布の概略をつかむまでに至った。この範囲は、西は国道153号線バイパスを境にして南は宮田村役場庁舎敷地から中央グランド北東地点より中越北線道路添に東にのび中部電力の鉄塔の東道路の南北に通ずる道が東側の境のようである。北側は、大沢川の段丘端を西に向かい、バイパス迄の範囲と考えられる。
 - 2 こうした分布範囲の中に、遺物の群別の集まりも考えられる状態に至った。今までの調査の中は大方ではあるが、遺跡の北半分ぐらいが古い遺構が分布しているようである。南半分程が、縄文前期初頭でも概して新しい時期のようである。しかし、この中にも古い時期も混在しているようであるので、今後の調査ではこの事実をふまえて研究したい。
 - 3 一応中越の土器の型式分類の試案は作成したが、まだ十分な裏付資料に欠ける部分もあると思われる所以、調査の都度だんだん違うものにしているところである。
 - 4 中越遺跡の立地する扇状地面の形成時期は、最近の調査によって、太田切扇状地の中でも最も新しいことが解ってきた。中越面の離水時期は、三岳スコリアの分布が見られないところから、今から5万7千年前以降であるようである。
- 以上、今までの研究で明らかになったことを記して結語としたい。 (友野 良一)



平成 2 年度発掘状況



154号住居址検出状況



155号住居址検出状況



旧中学校石垣



平成3年度発掘状況



166号住居址検出状況



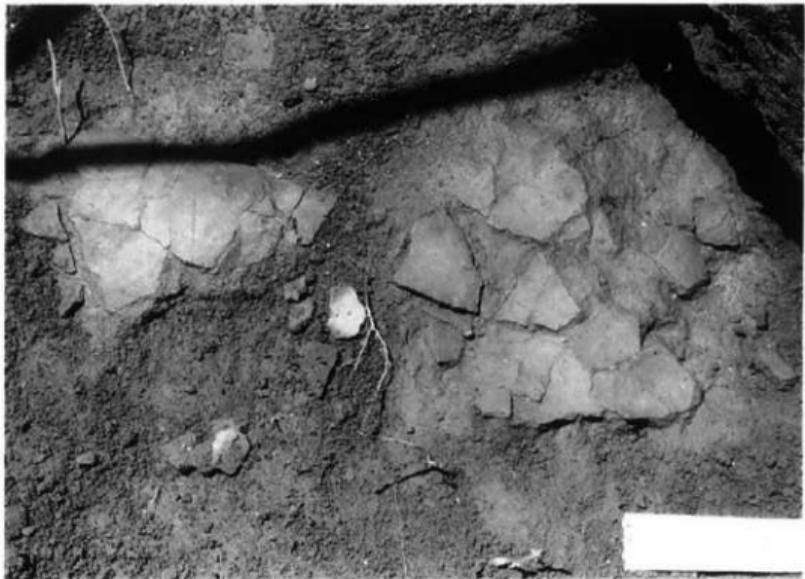
167号住居址検出状況



168・169号住居址検出状況（東より）



同左（西より）



170号住居址遺物出土状態



174～176号住居址検出状況

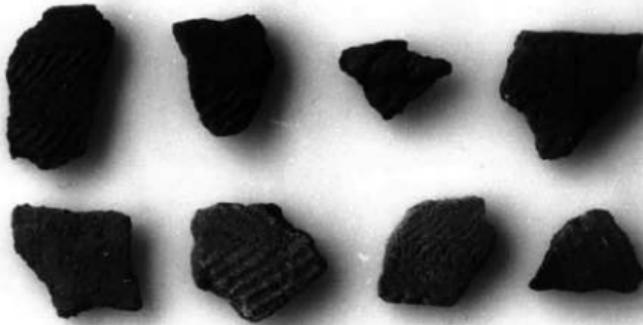


170号住居址出土土器

図版六
遺物

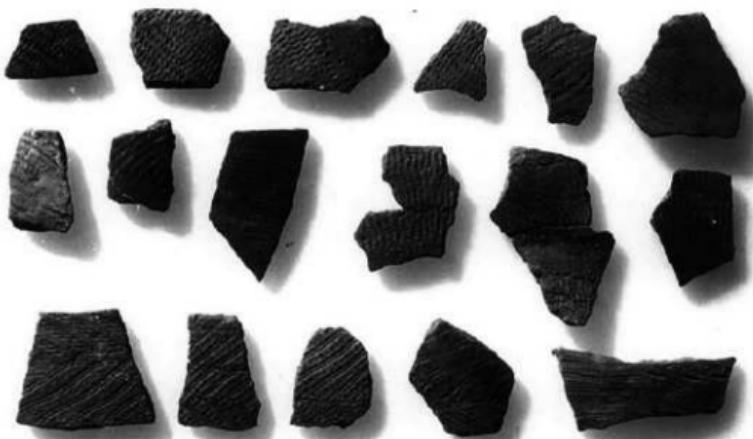


I期I群A



石英粒を含む土器

図版七 遺物・その他



II期I群土器



埋め戻し後の状態

下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

中 越 遺 跡

平成4年3月 発 行

発 行 宮田村遺跡調査会

印 刷 ほおずき書籍(株)

長野市中越293

